

人権作文 中学校

【市長賞】

ちがいを認め合える社会にしたい

西部中学校 一年 家永 悠羽

私たちのまわりには、いろいろな人がいます。元気に走れる人もいれば、体を自由に動かすのが難しい人もいます。耳がよく聞こえる人もいれば、目がよく見えない人もいます。口で話す人もいれば、声が出せない人もいます。こうした人たちは「障害のある人」とよばれることがあります。わたしが小学四年生のとき、目がよく見えない人が学校に来っていました。その人は白い杖を持っていて、歩くときはものしりなまわりの音をたしかめながら歩いていました。

教室では、点字の紙を見せてくれたり、「目が見えないって、いろんな人がぼくたちを助けるためにいろんな道具を作っているのよ」と話してくれたりしました。たぶん、スマホは音で文字を読んでくれるから、目が見えない人でも使うことができると思って、わたしはびっくりしました。そのときわたしは、目が見えないことがどれだけ大変かを初めて知りました。黒板の字も見えないし、友だちの顔も見えない、信号の色もわからない。そんな生活を想像して、「自分が同じだったら、どう感じるだろう」と思っても不安になりました。でも、その人はいつも明るくて、まっすぐに目をかけてもらえると嬉しい。「と笑っていて、すごいなと思いました。わたしだったら、ひらひらなってしまうかも知れないのに、その人は前向きに毎日をすごしているよ」と、いつも話を聞いてくれました。

るみたいになると思います。もし、目の前で困っている人が

いたら、「自分じゃあかんよはあかんかな。」と喜んで、声を

かけたり、手伝ったりできる人になりたいです。

「ちがう」は、悪いことではありません。人と人がちが

うからいい、おたがいに助けたり、わかり合ったりするこ

とができるのです。いろんな人がいるから、社会はもっと

せむこい、たのこいになると思います。わたしも、自分と

ちがう人をいながら、「いっしかりと向き合える人になり

たいです。そして、ふだんの生活の中でできることを少し

ずつやって、せむこい社会をいへるお手伝いをしたいです

らうと思います。



【特 選】

多 様 性 ？

西部中学校 三年 中島 成海

最近世間でいへる、耳にする言葉があります。それは「多
様性」です。ニュースやネットあるいは人の口からよく聞
きます。でも、わたしは多様性について正直よくわからま
せん。だからネットで調べてみることにしました。

そしたら、性別や年齢、国籍、人種、文化、価値観とい
った異なる特性をもつ人々が互いを認め合い、共存してい
くことだそうです。英語では「ダイバーシティ」と言われ
ていふそうです。わたしはこれを知ったとき、学校は「多
様性」がみとめられているのではないかと思いました。な
なかで「いへる」多様性もいへる、好き嫌いごとく嫌くないよせ、

ちがう人達が毎日生活しているからです。考え方はちがうから、じきじき意見などが噛み合わず衝突してしまっている。みんなが協力して生活できていると思いません。そこで私は疑問に思いました。

「多様性じゃなく、じきじき意見が噛み合わないから、そこで頭に思い浮かんだのは、社会の授業で習った同化政策です。これは日本が朝鮮半島を統治していた時代に、現地の人々に日本語を強制的に使させたことや、日本風の名前に変えさせる「創氏改名」という内容でした。これは朝鮮の文化や伝統、言葉を否定していて、完全に多様性とは言えないなと思いました。これをされた朝鮮人は、自分たちのしかっていた大事なものを否定されている気がして、とても傷つくと思います。このじきから、多様性を認めないことは人々の人権を傷つけるんだなと思いました。

ほかにわたしは色の好みなどがあると思いました。わたしのランドセルは黒色でした。でもリボンの刺繍がされていても気持ちよかったです。じきじきしながら初めて小学校に行ったときに感じたことは、「女の子で黒色の子がいない。」でした。周りの子はピンクや赤、おひまわりでも可愛い色で、少し恥ずかしくなりました。だって自分が一人だったから、でも一人の友達に「黒色めずらしいね。かわいい。」そう言ってもらいました。そこからわたしは自分のランドセルにとっても愛着を持ったし、大切にすることができました。

最後の卒業式では「このランドセルでよかった。」そう思いました。今思えばなんで恥ずかしくなったのだらうかと思いません。自分が好きなものに自信を持っていたのはいいことです。じぶんが一人で少数派だったとしても、誰かに

【特選】

クセを直そう

西部中学校 三年 藤井 麗煌

突然ですが、皆さん「撮り鉄」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。大抵の人は「交通ルールを守らない悪質な人たち」というイメージを持っていると思います。

確かに、実際に起った事件として撮り鉄が、写真を撮るために他人の私有地に勝手に入り、問題になったり、駅のホーム上で三脚を使い通行の邪魔をしたりしたことがあります。それらは周りの人の迷惑になる行為であり、絶対にしてはならないことです。そのような事件のせいか、今の社会では、撮り鉄は悪質であり、おかしい人であるというイメージが定着してしまっています。では、「いい撮り鉄」とい

ます。本当に撮り鉄は全員が悪質で異常なのでしょうか。

実は、私は俗に言う撮り鉄です。撮り鉄と言っても鉄道を撮ることこそが趣味というわけではなく、鉄道自体が好きというかんじではありませんが。私は旅行などで駅に行ったりするとよく電車を撮ります。他の乗り物からは感じることのできないあの重厚感や力強さ、そんなものを感じる瞬間瞬間を、写真や動画で撮りたいと思います。そのような写真を撮り、後で、自分で見返すというのがいいのですが、やはり、人間とは自分の好きなものを共有したがる生き物です。私も例外ではありません。ただし、あまり一般的な趣味ではないのか、そのような趣味でつながる友達は私にはいません。それでも、やっぱりそのような友達がほしいという気持ちの現れなのか、以前、私はある自己紹介の場で「実は、電車が好きなんだよね。」とある人と言

ました。結局は「へえ〜」とか「ふん」とかいろいろ反応を
やれて「あまり興味を引かないかな」なんてそのときは思
っていました。

しかし、返ってきたのは衝撃的な言葉でした。「まあ、
撮り鉄とかじゃならぬ」本当にびっぴりしました。その
ときは衝撃的すぎて「電車が好きなだけ」と本当の自分を
隠してしまっていました。そんなに撮り鉄というのは社会に認
められていないのかと、一部の人のせいではなせルール
を守る自分までもが、安心して自己表現もできないのかと
思いました。

なぜ、このようになくなったのか。原因はいろいろあ
りますが、一番は人々の「物事を大きく見てしまっクセ」
だと思います。主語が大きいという言葉を聞いたことがあ
ると思います。それは「クセ」のせい。このクセが

クセはよく偏見と言われます。今回この「問題を抱
いた撮り鉄」がいた」という事実を『撮り鉄』は非常識で
ある」という風に解釈してしまったのは、人間の偏見が理
由であるというわけです。この物事を大きく見る偏見によ
り引き起こされる問題は、世界中に数多くあり、中には
人命に関わるものもあります。世界的な例であれば紛争で
す。

これは現在、世界の大きな課題となっていますが、もと
を述べ、「相手の考えと自分の正しい」と思い考えが違い
という事実から「相手の考え方はおかしい」という意見に
変化し、最終的に「相手のすべて生活様式、文化、考え方
がおかしい」となることが原因です。これも「相手の考え
方」という部分が「相手の存在自体」へと大きくなってし
まっています。

「この偏見をなくしたい」と思っているのでしょうか。よく言われるのが相手の立場になって考えるということです。

相手の立場に立って物事を考えれば客観的に見えるはずだ
という意見があります。しかし、私はそうは思いません。

結局は当事者の視点にフィルターをかけているだけで、受け取る側は自分たちの都合の良いように解釈してしまっていると思います。ならば、何が一番良いのか。それはひたすらに事実を見なければなりません。「ある撮り鉄が問題を起した」という事実「問題を起さないと撮り鉄もいる」という事実「自分は自分の考えが一番だと思っている」という事実「相手は相手の考えが一番だと思っている」という事実。事実とは不変でどんな視点から見ても正しいものです。つまり、絶対に客観的なものということです。数多くの事実と自分の意見をつなぎあわせ、そのつながりを入念に

確認するのは意見が客観的に限りなく近くなり、偏見はなくなると思えます。

しかし、それを求めるのは本当に面倒くさいことです。この面倒くさいから考えることを放棄したくなる。だから、これは人間のクセなのです。ですが、逆に言えばこれは人間のクセであり、性質ではありません。いくらでも改善することができます。私達一人ひとりの細かな意識の違いで、差別や紛争をなくせる。そう思っている面倒くさい人、活力が湧いてくるのではないのでしょうか。そう考える人が増えたらなにより私は思います。



【準特選】

ネットの言葉は人を傷つける

西部中学校 一年 武富 叶渚

今、私達の生活に欠かせないものの一つに、SNSがあります。友達と簡単に連絡をとったり、自分の気持ちや出来事を共有したり、世界中の人とつながったりできるのも便利で楽しい道具です。私自身も毎日のようにSNSを使い、友達とスタンプを送り合ったり、しゅみの事を発信したりしています。

しかしその一方で、SNSには大きな問題が存在しています。私は最近この問題について、ニュースを目にしたの actual SNS上で心ない言葉を見たりする中で、強い不安と疑問を抱きました。なぜ人は見えない相手に対してこんな

なにも残さず言葉投げかけてしまうのだらう。SNS上でのいじめや誹謗中傷が起きやすい理由の一つは、とくめい性にあると思います。顔や名前が見えない安心感から、普段なら絶対に言わないような言葉を平気で書いてしまう人がいます。また、直接相手の反応を見ることがないため、相手がどれだけ傷ついているのか想像しにくいのだと思います。

けれども、画面のむこうにいるのは、私たちと同じように心をもった一人の人間です。その人がどんな思いでSNSを見ているかを考えれば、いかに安易に心ない言葉を投げかけるかは決して許されないうた感じます。

さらに、SNSの特性として、一度書かれたことが消え残ってしまうという問題点があります。たとえ投稿を消してしまっても、すでにスクリーンショットやコピーがわかって

葉になるかもしれませんが。SNSでは文字だけで相手に気持ちや正確に伝えることは難しく、ちょっとした表現の違いで誤解を生んでしまうこともあります。だから人と、相手を思いやる気持ちを忘れず、優しい言葉を伝えたいことが大事だと考えています。人の心を傷つけるのも、救いのもと、どちらも「言葉の力」です。SNSが広がった今だからこそ、一人ひとりが「言葉には力がある」ということを強く意識しなければなりません。SNSは本来、人を傷つけるための道具ではなく、人と人をつなぐための便利な手段です。その使い方を誤らず、みんなが安心して使えるようにするために、私自身も言葉を大切にしていきたいと思っています。

そして、社会全体が「ネットの向い」に向けるのは、自分と同じ人間である」という意識を持つことができれば、誹

謗中傷やネットいじめはもっと少なくなると思います。私はこれからSNSを使うしつづけると思います。だからこそ、ただ「楽いから」「便利だから」と使うのはダメ、その影にさまざまな危険や問題についても忘れずいたいです。そして、もし誹謗中傷やネットいじめを目にしたら、勇気を持って声をあげ、被害にあった人が安心できるように寄りそいたいです。言葉を大切にすれば一人ひとりの小さな意識の積み重ねが、やがて大きな力となり、だれもが安心してSNSを楽しめる社会につながると思います。



【準特選】

偏見

西部中学校 一年 西 はるな

す。たとえば、テレビや新聞、インターネットなどのメディアが伝える情報によって、ある一つのイメージが偏って広まることがあります。

例えば、

「外国人は危険だ」

「障害のある人はかわいそつだ」

私たちが暮らす社会は、個性ゆたかな人々が共に生活しています。国籍や文化、言語、性別や年齢、障害の有無など、さまざまな違いを持つ人たちが出会います。その中で、互いを理解し合い、尊重し合うことはとても大切なことです。しかし、その一方で、偏見という壁にぶつかるとも少なくありません。

といった誤ったイメージが根付くこともあります。また、子どもの頃からの家庭や学校での教育、友達や周りの人たちの言動も偏見を生む要素です。

偏見とは、実際に会ったこともない、あるいは十分に理解していないものに対して持つ先入観や誤った考え方のことを指し、時には人権侵害や差別の原因ともなります。

こうした偏見は、私たちが何気なく持つ先入観や固定観念から生まれることが多く、それに気づかずに日々の言動や判断に影響を与えてしまいます。

「外国人は言葉が通じないから危険」

偏見は、私たちの無意識のうちに形成されやすいもので

「障害者はみんな違って特別」

といった考えは、その人の本当の姿や能力を見ずに決めつけてしまっただけの見方です。

偏見は、時に大きな差別や誤解を生みます。職場、社会の中で、偏見を持つ人による偏った扱いや無視、いじめなどが起こり、被害を受ける人々の心は傷つきます。障害のある人や外国人、性別による差別は、その人たちが本来持つ潜在的な可能性や夢を奪ってしまうことになりかねません。

私が小学生の五年生の時にフィリピンの子が転校してきました。最初は、「外国人だから少しこわいな」と思っていました。

けれど、話をしてみると、とてもニークで外国人への偏見のイメージがガラッと変わりました。私は外国人だから、という理由で勝手に悪い方の偏見のイメージしかしていなかったのを反省しました。

また、私の身近な例では、クニスの中で、

「女子はじつあるべきだ」

「男子はじつあるべきだ」

という風潮があります。例えば、女子はおとなしくしなければいけない、男子は運動が得意でなければならない、といった固定観念です。こうした偏見は私達の本当の個性や希望を奪ってしまうことでもあるのでとても危険だと思います。

この体験を通して私は、偏見というのは他人の自由を奪う危険なものだと考えました。

偏見をなくすために私たちができることは、何よりもまず、「自分の偏見に気づくこと」が大切だと考えました。自分が持つ先入観を認め、それが間違っていることを理解しなければ、変わることはできません。

次に、実際に異なる背景や文化を持つ人と交流し、お互

【準特選】

デジタルタワーと人権

西部中学校 二年 小池 瑛士

い話を聞くことです。例えば、外国人の友達と一緒に遊んだり、異文化交流のイベントに参加したりするだけで、偏ったイメージが崩れていきます。私も、転校してきた外国人の友達と交流する中で、その人たちの考え方や生活の仕方を知り、偏見が少しずつ解消されていきました。

偏見は、誰でも持ちやすいものですが、それにとらわれずに、互いを理解し合う努力を続けることが、より良い社会への道だと私は思いました。自分の偏見に気づき、交流や情報収集を通じて、それを少しずつ乗り越えていくことが大切です。

私たちの一人ひとりの行動や心が変われば、きっと未来はもっと明るく、多くの人が安心して暮らせる社会になるはずです。だから今、今日からできる小さな一歩ずつ実践して、偏見のない社会を私はつくりたいです。

インターネットが生活の一部になった今、私たちはSNSや動画サイトを通じて、気軽に情報を発信したり共有したりしています。しかし、その便利の裏で忘れてはならないのが「デジタルタワー」という問題です。

「デジタルタワー」とは、一度ネットに投稿した写真や文章、動画がたとえ削除しても完全に消えず、「コピー」や拡散によって半永久的に残ってしまう現象を指します。Twitterが簡単には消えないように、ネット上の記録も消すのが難しいです。この問題は、ただの技術的な問題ではなく、私たちの人権や人生に深く関わっています。

実際に、デジタルタワーによって大きな影響を受けた例は多いです。ある大学生は、高校時代に友達と軽い気持ちで悪ふざけをして撮影した動画が、卒業後もネット上に残っており、就職活動の際に企業の担当者がそれを見て内定を取り消したと。動画の内容は違法行為ではなかったが、「社会的にふさわしくない」と判断されました。また、別のケースでは、SNSで不用意に友達をからかうような書き込みをした人が、その投稿を第三者に拡散され、見知らぬ人たちからも批判や中傷を受け、精神的に追い詰められてしまったという。本人はすぐに投稿を削除したが、「レピー」が出回り続け、数年経ってもその話題を持ち出されることがあったという。こうした状況は、プライバシーや名誉を侵害するだけではなく、人としての尊厳まで深く傷つけているとみられます。

では、デジタルタワーの問題について何をすべきだろうか。まず大切なのは、私たち一人ひとりが「ネット上での言動には責任がある」という意識を持つことです。投稿する前に、それが将来の自分や誰かを傷つけることにならないかを考える習慣が必要だと感じる。また、もし過去の投稿で苦しんでいる人がいたら、その人をからかったり情報を広めたりせず、再スタートを応援する姿勢が大切だと思います。

社会全体での取り組みも欠かせないです。ヨーロッパでは「忘れられる権利」という仕組みがあり、条件を満たせば検索結果から自分の情報を削除できる制度があります。日本でも近年、ネット上の誹謗中傷に対応するための法改正や、情報削除を求めやすくする制度が整いつつあります。こうした制度を充実させ、広く知ってもらうことで、誰も

【準特選】

が安心してネットを利用してみんなの環境をいへるじよがでみんな
と思います。

戦争と人権について

ネット社会では、一度広がった情報を完全に消すじよは

西部中学校 二年 有森 龍

難じよです。しかし、だからこそ私たち一人ひとりが責任
を持ち、他者の尊厳を守る行動を心がけるじよが重要だと
思います。デジタルタワーが一生の重荷になる社会では
なく、「過去を乗りこえて、誰もが新しい一歩を踏み出せる
社会」を実現するために、私たちはこれからもネットじよの
向き合い方を考え続けていきたいと思います。

人権を考える上で、戦争と核兵器はなくてはならないもの
ならぬものだと思います。

まず、「戦争」じよについてです。戦争は、もっとも人権を侵
害するものだと思います。どんなに戦地に行く意思がなく
ても関係なくおもむかなければならないし、戦地に行かな
かったとしても、いつ攻撃を受けるか分からない恐怖じよ、
いつ敵が攻めこんでくるかも分からない不安じよ、安心して
眠るじよもできませぬ。そこじよわは、敵味方関係のない
じよです。戦争は、全く笑顔をいへないじよはあごませぬ。

今年、戦後八十年という節目の年です。僕の身近な人



に戦争を語る人はいません。戦争の悲惨なや辛さは、テレビや新聞から少し実感するのみです。友達や家族を失った悲しみや苦しみは、僕が想像している何倍とは言いきれないほどだったと思います。戦争の体験を語る人にとっては、思い出したくもない過去で、涙される方もいらっしゃると思います。しかしそれでも、その戦争を一度くぐり返さないと、僕たちに伝えてくたさっていきません。そしてそれを僕たちは、身近な人やまた戦争のことについてよく知らない次世代の人に、伝えていかなければなりません。戦争の話を他人事としてではなく、「もし一度お話ししてほしいからね。」と一緒に話さないと話せません。そのため、「もし過去のことで、知らない。関係ないよ。」と言って戦争を他人事のように考へてしまっている人は、やはり絶対話さないと、また戦争を体験した人がいるよ、

どんなことがあり、どんな辛いことがあったのかなど、体験した人にしか分からない詳しいことを知って、伝えて二度と起こさせないようにすることが重要です。しかし、今でも世界では、戦争が起きてしまっています。これは非常に残念なことですが、今もどこかで戦争の影響で苦しんでいる人がいます。望んでいないのに戦わなければならない人がいます。こんな世界で人権は守られるのでしょうか。みんなで束になって、平和をうったえ続けていくべきではないのでしょうか。

そして、11月にならなければならぬものは「核兵器」です。日本は、唯一核兵器が使用されて多くの人の命がうばわれました。そして、奇跡的に生き残った方も、とても辛い後遺症に苦しみながら生きています。その耐えがたい経験を知っているのは日本しかありません。しかし、

核兵器禁止条約には日本は参加していません。核兵器で威嚇したりしている間は、本当の平和は、絶対におとすれません。僕は全ての国が核兵器を捨てることを望みます。それであっても、地球は限界をむかえようとしています。これはみんなで手をとりあって、協力していかなければなりません。核を手放し、廃絶し戦争を終わらせて、世界を平和にし人権を守る。全ての人と手をとりあって、地球に優しく、発展すべき美しいな世界であらうです。

やはり、戦争をなくしようとする事が起るのではないのです。まあ核兵器や戦争に使用するための武器がなくなるまで。むしろ、それを作るまだなお金があります。むしろ、貧困をなくしようとする方が多くなります。学校に行けなくなったりする人が多くなり、むしろ、世界が発展しようとする方が多くなり、むしろ、世界が発展しようとする方が多くなり、

それだけではありません。戦争でなくなってしまう方もいなくなり、悲しみをまなくなるのです。しかし、この逆で、「戦争をする」という状態におちいってしまうと、負の連鎖がはじまります。先ほど説明したものの真逆になってしまうのです。そしてそれは、どんなにプラスな状況になってもです。そして今の世界は、マイナスな状況に片足入っているのです。なぜなら、今もどこかで戦争が起るという、核兵器を保持しているからです。もし、この負の連鎖がいられて、日本も戦争してしまうと、この最悪なものになる可能性は捨てるべきではありません。なので、日本国憲法を守り、みんなで束になり、平和をついた継続的に、核兵器を未来にしようとするのです。

その未来を実現するためには、やはり戦争のじやを詳しく聞いて、伝え、核兵器廃絶のために行動し、戦争をい

うじや必ず約束する。戦争や核兵器のない、安全安心な人の権利を無視しない世界にしようと思います。

【準特選】

どんなに「今」がつらくても

西部中学校 三年 有森 愛姫

皆さんは自分を大切にしていますか。兄弟、友達、クラスメイトなど比べ、自分に劣等感を抱え過去の失敗を気にして、うじやでも自分を責めたりしていませんか。そんなうじやが積み重なると自ら死ぬうじやを避け自殺をしてしまうのではなにかと私は思います。実際に私も自分を傷つけてしまいうじやがよめぬうじや。

なぜか、うじやの無量の口癖でうじやを苦しめてくつや。

私には兄弟が四人います。私は一番上の長女です。お風呂をためたり、料理の手伝いをしたり、頼まれるのは他の三人じゃなくいつも私。みんなに頼んでも行動するのが遅く結局、私が動いたり言ったりしないと何も行動してくれませんが。

私が行動しても、たまに一番下の妹に文句を言われてしまいます。何も行動しないからでしょ。と思う「そんな私に文句を言うなら代わりに自分でやったら良いじゃん。私は明日から頼まれても何もしないから。」と言って任せても結局動かないので何度も何度も同じうじやを繰り返します。しまいは「何でやってくれないの」と言ってきた、私だけ動いて損をし、他の人は動かさなくてもいいからうじやをする。兄弟の中で一番上に生まれなければ良かったなあ。なまど長女として生まれたいと思ったんだなうじや。

たぐないのは一番下の妹です。妹は二年生ですが、テストではいつも満点、スライミングを習っていて泳ぎも得意、陸上も習っていて、マラソン大会では余裕で一番、習字にも通っていて字も上手、明るくて誰にでも声をかける事ができ、友達と一緒にいるときは話の中心にいるのは妹のよきな気がします。

私は泳ぎが不得意で泳げません。なので、私が泳ぐ話になるといつも笑って劣等感を抱いているじやを隠しながら、偽物の笑顔を顔に貼り付け自分の出来ないことを笑い話にしています。走るのも体力がないので長距離を走るじやが苦手、習字は妹のほうが良い賞を取ったじやがあるのに加え、周りの人に話しかけるのが苦手です。じやちかじやちか一人と読書をしようとするじやが多いと思います。比べてみてわかるじやの妹です。なので、心が限界なまわりのじやが

に比べてしまっていて自分自身がイヤになり、最終的には何日かの間自暴自棄になります。

私と同じように兄弟の中で一番上だという人は、少なくとも末っ子と比べて劣等感を抱く人は少なくともないと思います。兄弟でなくても友達と比べ、劣等感を抱いた人はいるのではないのでしょうか。そんなときは必死に自分の気持ちを押し殺さず、一人の時間を取って気持ちを落ち着けたら、同じ悩みを持っている人が近くにいるなら、その人と話したりすることで心が軽くなるかもしれません。なぜなら私は今、従妹が長女で、長女の嫌なじやを共有するじやで、心が軽くなりました。

積み重なって溢れ出す前に自分の気持ちを大切にしていってください。いしか自分と同じ苦しみを持った人の心の支えにならなければいけません。